二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

鬼巫女の桜華

邪霊の墨女

小説 大杉和馬
挿絵 助三郎

序　章　006
第一章　天位の巫女　013
第二章　淫蛇の抱擁　022
第三章　鬼巫女桜樺　055
第四章　肛虐の蟲鬼　077
第五章　桜樺散華　104
第六章　婚姻の儀式　137
第七章　禁断の母娘（おやこ）責め　182
第八章　闇に堕ちた鬼巫女　215

登場人物紹介

Characters

山守 桜樺（やまがみ おうか）

鬼の血を引き、日本でも屈指の退魔能力を持つ巫女。髪留めを解くことで、銀髪の鬼巫女へと変貌する。

銀鬼（ぎんき）

古城を住処としている鬼。強大な力を誇り、数々の妖魔たちの上に君臨している。

山守 廉信（やまがみ れんしん）

一見、好色そうに見える老人だが、実は孫思いの桜樺の祖父。

山守 静（やまがみ しずか）

廉信の娘の退魔巫女。かつて銀鬼に闘いを挑むも陵辱され、桜樺を孕む。しかし彼女を産んだあと、まもなくして逝去。

『第二章　淫蛇の抱擁』より

「しょ、小心者が……はぁ……自分の妖魔(なかま)を捨て駒にし……くうぅ、怪しげな薬に頼らなければ、女一人……抱くこともできないのか？」

囚われの身、自分の陵辱を待つだけの女に心の底から見下され、思いも寄らぬ反撃まで受けた蛇妖、その無意味に高いプライドを盛大に逆撫でられた。

「このガキィ……人が優しくしていればつけ上がりやがって‼」

紙よりも薄っぺらい優しさの仮面を脱ぎ捨て、屈辱と怒りに整った美貌を真っ赤にする妖魔を睨み、桜樺は一歩も引こうとはしない。

「面白ぇ……意地でもお前を屈服させてやるぜ」

「ッぐううっ‼　や、やってみろ……」

怒れる妖魔に全身を強烈に締めつけられる苦痛の中に在っても、そこに宿る覇気が薄れることはなかった。吼える桜樺の首まで締めつけ、苦悶に喘ぐ唇を再び強引に奪い去る。

一瞬の躊躇もなく再び噛み切ろうとするが、当然のように、そんな桜樺の抵抗など解っていた妖魔の手が細い顎を掴み、今度は閉じることを許さない。

「んむっ……この……んんっ……」

誰にも許したことのない唇を好き勝手に穢す。妖蛇の舌は可憐な舌に巻きつき、搦め捕ると口内から無理矢理引き出した。首を振って逃れようとする巫女の頬には冷たい手の平が添えられ、細いその手を振り払うこともできずに蹂躙される。

「けっ、甘くて美味い舌と唇だぜ……おらっ、もっと味わわせてくれよ……んん……」

引き摺り出された舌が妖魔の口内で淫らに踊らされる。抵抗しようと身体が暴れ跳ねるが、両手も両脚も拘束され、抱きすくめられた身体はビクともしない。

必死に首を振って逃れようとしても、蛇の身体に首まで巻きつかれた状態では、舌と唇を好き放題に蹂躙されてしまう。いつしか酸素不足に頭はボウッと霞み、媚毒に犯された身体は巧みな舌技に早くも酔い始めていた。

拘束された両手は拳を作って屈辱の怒りに震え、きつく握り締められる。淫らに絡み、踊る舌と舌の演舞は舞台を桜樺の口内へと移し。くぐもった声音と唾液の混じりあう水音とともに口内は粘性の強い体液同士に洗われ、穢され、そして弄ばれてゆく。

（くそっ……頭が痺れる……身体が……熱い……っ）

空いている片方の腕も胸を嬲ることを忘れない。緩やかに円を描きながら胸全体を愛撫し、時折、襦袢の内側で硬くなっている乳首を掠めるように刺激する。口内と胸全体から発する甘美な電流に桜樺の身体は徐々にだが開き始めていた。

「～～～～～～～～～～っ!!」

細長い舌に喉の奥をつつかれ、桜樺の喉がボコリと蠢いた。こじ開けられた食道を妖魔の生暖かく粘性の強い唾液が嚥下（えんか）されていく。

「げほっ!!……げほッ!!　……ぁ……っ!?」

「へっ……美味しい唇だったよ、ご馳走様♪」

無理矢理に汚液を嚥下させられたおぞましさと怒りに身を震わせ、射抜かんばかりの視

線をぶつけるが、その瞳は夥しい快楽に濡れ、霞んでいる。
「なんだ。いい表情するじゃねえか。素直に抱かれる気になったかい？」
「はぁっ、はぁっ……この、下手糞……っ！」
毒に犯された身体が快楽に溺れかけていても、その心はヒビさえ入ってはいなかった。男の体液が混じりあった唾液を汚らわしげに蛇妖の美貌に目がけて吐き捨てる。
「大した度胸だ……」
すべての表情を失った氷の魔貌を唾液が伝い落ち、聞く者の魂を凍えさせる声が呟いた。
フワリと桜樺の両脚が大地を離れる。両手と胴を拘束している蛇体はそのままに、太股から足首まで巻きついていた拘束が解かれた。
（な……なんだ？）
一部とはいえ束縛を解かれ、戸惑う桜樺には応えずに、不意にその脚の間に蛇胴を割り込ませる。反射的に膝を閉じようとするが間に合わず、蛇腹の上に跨らされる形になった。
「ぐううぅぅっ……!!」
桜樺を宙に持ち上げていた力が消失し、全重量を股間で受け止めさせられた衝撃に息が詰まる。僅かに前傾の姿勢では衝撃の起爆点が一点に集中し、しかも両手は支えに使えない。全身の骨を無理矢理振動させられ、鼻腔の奥を何かが突き抜け、呼吸が停止する。
「痛っ……な、何の真似だ!?」
衝撃の余韻が消えれば、両手を縛られ、丸太に跨らされたような立ち姿勢は多少苦しい

が、これでどうこうなるということはない。桜樺は辛うじてつま先が地面に届く高さで固定された姿勢で、妖魔の狙いが解らずに困惑した。

ズルリ……。

「……!?」

その問いには答えず、腹を上にして少女を跨らせたままの蛇の胴体が、前方に押し出される。緋袴の中心をすり抜けながら動く蛇の胴に、腰が僅かに前に引き摺られ……腰の中心に走った痛烈な爆発に、意識が一瞬とはいえ弾けた。

（な……んだ……と？）

ピンと背筋が突っ張り、喉を反らした。何が起こったのか解らなかった。上を向いた蛇腹の起伏が、布地越しに掠めるように擦過してゆく。ただそれだけなのに……微弱な振動は何十倍にも増幅されて、暴力的な衝撃が背筋を一直線に撃ち抜いた。

「ククク……敏感なことだねぇ……」

「あ……がっ……き、貴様!!　何を……っ!!」

前に突き出た分が後退し、今度は僅かに尻を後ろに突き出すように前屈姿勢を取らされる。それだけで、蛇の束縛がなければそのまま腹這いに突っ伏しそうになった。背筋の中心を駆け巡り、脳天まで揺さぶるような振動に、腰に力が入らない。

「ほぉら、ほぉらどうした？　さっきまでの威勢は？」

蛇胴の前後運動は、勢いも動きも決して大きくはなかった。

だが、すでに妖魔たちの毒は桜樺の全身の隅々まで浸透し、神経を蝕んでいる。むしろ気丈に振る舞える今の桜樺の精神力こそ驚くべきだ。蛇胴の単調な動きは、やがて尾全体がうねるような動きを加え始めた。

「この、やめろっ……きさ……ま!!」

グラグラと揺れるだけの動きだが、今の桜樺にとっては暴れ馬に乗っているに等しい。毒によって研ぎ澄まされた神経が脚の間で立て続けに起こる暴力的な感覚の小爆発を余すことなく全身に伝播させた。ドッと全身からイヤな汗が吹き出し、辛うじて地に届いているつま先に力を込め、腰を浮かせようと足掻く。

「くくく……どうだい？　たまらないかい？」

「だ、誰が……くぁぁっっっ!!　く、そこっ、そこは……っ!!」

キュウッ……白衣の上から解るほど硬く屹立していた両胸の頂が、細い指に摘み上げられる。その一点から鮮烈すぎる稲妻が胸の中心を貫き、脳の頂まで突き抜けた金色の電光に思わず高い声を上げた。

性的感覚に対しあまりに無知な身体は、下半身からの苛烈にすぎる感覚を快感として認識できない。だが強制的に快楽で地ならしされていく神経は、その代わりとばかりに胸や首筋から無理矢理提供される、痺れるような悦美感に、悔しいくらい素直に反応を返してしまう。

「生意気な口と違って、身体(こっち)のほうは素直だねぇ……」

「……ッ!!」
侮蔑の揶揄に意識が真っ赤に灼ける。自身の不甲斐なさに憤り、両の太ももできつく蛇を挟んで、せめてその衝撃を緩めようと足掻いた。だがその胴体はヌメヌメと気味の悪い粘液で覆われており、それさえ難しい。
「はああぁっ!!」
ズン……それでも不屈の精神は僅かに腰を浮かせることに成功した。だが、そんなささやかな努力を嘲笑うように蛇が勢いよく動き出せば、腰は滑り落ちてしまう。結果、倍加した衝撃が股間を突き抜け、虐悦の波動となって蕩け始めている秘肉の洞窟を強襲した。
(私が……こ、こんな奴にいいようにされて……身体が……こんなっ!!)
ズン!! ズン!! ズン!!
下半身から送り込まれる振動にリズムを合わせるように豊乳が捏ね回され、首筋を舐め上げられた。辛いだけの虐震が、やがて上半身の甘美な愉悦と混じりあい、強い酒気に支配されたような酩酊感となって意識を霞ませる。巫女の身体と心から抵抗を徐々に奪っていった。
「どうしたんだい? うん? 随分と大人しくなって……まさか卑劣で小心者の俺に気持ちいいことされて感じちゃったとかねぇ?」
翻弄され懊悩する桜樺の表情を、蛇妖は背後から金色の目を細めて眺める。双丘の頂を白衣の上から摘み出しゆっくりと揉み、喉を鳴らしながら首筋に口付けた。

「くっ……ぁ……黙れ……ひ、卑怯者め……ぅ……貴様などに――――くぅぅぅっ!!」

必死に反抗し、拒絶しようとする言葉が弾け、途絶える。

妖魔の真紅に濡れた唇が巫女の耳朶を甘噛みし、小さな耳穴に生臭い吐息を吹き込んだ。耳穴から脳へと直接電流を流し込まれたような衝撃に総身が痙攣して、思わずきつく目を閉じる。

（も……もう、妖魔の毒が……ここまで回って……ッ）

だが、毒の影響ばかりではない。下半身を襲う暴力的な感覚と裏腹の、上半身への甘美な微悦責めに潔癖な巫女の心が追いつめられていく。恐ろしいまでに女を知り尽くした手管に身体が勝手に応え始めていた。

クチュリ……。

「――――ッ!!」

不意に粘りのある水音とともに、桜樺の全身が跳ねる。上半身に意識がいっている隙が突かれ、妖魔の片手が緋袴の脇、スリットから中へと潜り込んでいた。

「ハハハ、おいおい、もう気分出してるんじゃねぇかよ。お偉い巫女様は下衆な妖魔の俺の腕の中で感じて、濡らしちゃってるの～～ってか？」

「う、違っ……違う。汚らわしい……ふざけたことを言う……くッぁぁああ――――ッ!!」

ヌルリ……男性経験はもちろん、自ら慰めることさえ忌避してきた無垢な秘貝に指が滑り込む。毒に狂わされ、綻び、緩んだ身体は驚くほどあっさりと陵辱者を受け入れた。

「いいねえ。可愛いねえ……必死な感じが伝わってきていい感じだ」
「あぐうううぅ〜〜ッ、や、やめっ……ッあああァァっ!?」
バシッ!! フラッシュを焚いたかのような眩い閃光が瞼の裏で弾け、子宮まで貫いた鮮烈な衝撃に、胎奥を激しく揺さぶられた。指の一本、第一関節に過ぎないとはいえ誰の接触も許したことのない敏感な粘膜内への侵入は、恐ろしいほどの圧迫感を無垢なる巫女に強いている。
噛みつくように締めつける、女体の抵抗を無視し指がゆっくりと動き出した。指先を曲げただけの微動、たったそれだけで拘束された桜樺の細身が激震した。指が動くと水音に合わせるように跳ね、震える身体、まるで妖魔の指一本で全身を支配されたかのようだ。
徐々にほぐれてきた入り口付近を丁寧に人差し指でならしながら、そっと親指で花びらの上の慎ましく色づく小さな秘芽を掠めるように撫でられた。
「あっ、ひっ、こ……この……そこ、そこは……触れるな……っ」
痛烈な拳打を受けたかのように細い頤が跳ね上がる。未だ包皮に隠れたままの肉芽から起爆のスイッチにでもなっているかのように、頭の奥で、子宮の中で、無数の爆弾が炸裂し、身体中のあちこちで紅蓮の火の手が上がった。頑なだった秘唇は今やしっとりと潤いを帯び、おぞましくも冷たい陵辱者の指に健気(けなげ)に絡みついている。
「ふふふ……やはりここが弱いようだね。遠慮はいらない、存分によがり狂うがいい」
ギリギリッ……脳が沸騰するほどの屈辱と認めがたい感覚の暴雨に抗い、奥歯が鈍い音

を立てて悲鳴を上げた。
緋袴の中に潜り込んだ妖魔の手が淫らに蠢いているのが、僅かに赤く染まった布地越しでもはっきり見て取れる。そのたびに響き渡る水音が桜樺の言い訳を悲しいほどあっさり否定し、指がもたらす恍惚の快楽が勇ましい声を惨めなほど簡単に中断させた。
（馬鹿な……そんな……ことが……あ、あぁ……あるわけが……ない）
クチュ……ヌチュ……クチュチュッ。
響く水音の中、気丈な巫女が快楽という罠に搦め捕られていく。
ツゥ……開かれた白衣の胸元、剥き出しになった肩を唾液の跡を残しながら妖魔は唇を滑らせた。ゾクゾクと背筋を走る危険な悪寒に、弓なりに反らした背中の震えが止まらない。襦袢の内から弾けるように零れ落ちた瑞々しい乳果は、妖魔の手の中で巧みに形を変えながら転がされている。
「ほぉら……袴のここがシミになってるぜ。おいおい、また中が熱くなって、どんどん溢れてきたぞ？　恥ずかしくて濡れちまったのかよ？　ほぉら見てみろよ」
袴の脇から引き抜かれた妖魔の手、開かれた指の間で糸を引く快楽の証を、桜樺の顔の前で見せつけ、ヌチュヌチュとわざとらしげに音を立てた。自分の身体が快楽に酔っている証拠が、自分が妖魔の責めに屈している現実が突きつけられ、思わず目を閉じて顔を逸らす。
「くぅあ……貴様……くううっ……貴さ……まァッ!!　ううん……うっむぅ……」

小さく首を振りながら、それでも憎まれ口を叩く唇の中にその愛液まみれの指が差し込まれた。可憐な舌が摘み出され、味蕾に直接、自分の愛液を味わわされながら弄ばれる。
「どうだい？　自分の蜜の味は？　ほら俺にもご馳走してくれよ」
指が引き抜かれ、またも唇が奪われた。引き抜かれた指は再び袴の中へ潜り込んでいく。
不気味なほど赤い満月が蛇と美しい巫女の背徳の口づけを、淫卑な口虐の情景を照らし出す。一体と一人の口内で恥蜜混じりの唾液が溶け合い、熱く乱れた吐息が絡み合った。
「ぐっ……ん、ンンン……い、いやっ……ん、んん～～っ!!」
歯を立てようとして、顎に力が入らず失敗する。逃れようと暴れ、あるいは縮こまろうとする舌を妖魔は巧みに翻弄し、舌同士を絡め合い、次々と口内に唾液を送り込んだ。
クチュクチュ……クチュプ……クチュヌチュ。
上の口では唾液が、下の口からは愛液が掻き混ぜられる音が、骸の焦げた匂いの漂う戦場にやむことなく響く。緋袴の脚の間で波打つようにうねり、揺れる蛇腹に合わせ、小さくだが桜樺の腰は自ら求めて動き始めている。
真っ赤に染まった袴が淫らに蠢くたびに、ドロドロに溶かされてしまいそうな熱気が腰の奥を炙り、高熱に浮かされたように濡れ霞んだ瞳が、焦点を失っていった。
（こ……んな奴に……私が……こんなどうして……く、あぁ……）
何よりも無力な自分に対する悔しさに、思わず目尻の端から涙が滲む。
口を塞がれ満足に息ができないせいで、脳の芯までボォッとなった。上と下から響く水

音だけが頭の中に嫌になるほど鮮明に響く。痛みを伴わない快美のみの責めが無垢な身体と意識を快楽に酔わせ、蕩けるような媚悦の細波が強靱な意志さえどこまでも押し流した。

「ふふふ……そうだ。そうやって大人しくしていればいい。そうすればお前のような美しい花は優しく愛でてやるぜ」

嬉しげに細めた金色の魔眼が、焦点を霞ませる黒の瞳を間近で覗き込み、漆黒の艶髪を愛しげに撫で梳いた。

（あ……あぁ……？　……か、身体の奥から何……何か……？）

ズクン……腰の奥深くに生じた不吉な予感、得体の知れない衝動が桜樺を慄かせる。

未知の感覚への恐怖が快楽に酔い潰れた意識を無理矢理覚醒させた。貪られていた唇を振り払うと、迫り来る破滅の瞬間に慄き、必死に抗おうと首を振る。

「あっ……ふあぁ……ンむァあぁ……なん……だ……？　これは……？　くうぁあぁ!!」

「なんだ？　イクことも知らないのか？　こりゃあいい。俺が念入りにその身体に教えてやるぜ……」

執念にも似た執拗さで、桜樺の唇を再度奪い去り、貪りながら責めを激しくしていった。

二本に増えた妖魔の指が処女花を傷つけないように細心の注意を払いながら浅く、ゆっくりと抜き差しを繰り返しながら、秘肉を丹念に掻き混ぜる。次々と溢れる恥じらいの雫は枯れることを知らず、袴から染み出した蜜で蛇の腹が濡れ、月光を反射して光っていた。

「ンふあぁ!?　イ、イ……ク？　ふざけ……るな。そ、そんなこと……くっ、あぁ!!」

これまでのような否定ではない。初めて去来する絶頂の予感、憎むべき卑劣な妖魔風情にそれを強いられる悔しさ、自分が自分でなくなってしまうような戦慄に支配された。

ズン!!　ズン!!　ズン!!

荒々しい被虐のロデオがもたらす下半身への虐待も、すでに痛苦は失われて久しい。それどころか甘美な悦震へと変じた振動に子宮の奥を小突かれまくり、桜樺は処女のまま不可視の肉棒に犯されているかのような虐感を味わい続ける。等間隔に股間から吹き上がってくる快美の熱波は行き場を求めて荒れ狂い、聡明な脳をグチャグチャに蕩かしていった。

「だ、だめ……だっ……こんな……こんな奴などに……うんんぅっ……い……いやだッ!!」

限界まで伸び上がった白足袋のつま先や硬く握り締められた両手はブルブルと震え、何かを怖れるように瞼はギュッと硬く閉じられる。一気に熱を帯びた膣洞がドッと甘い蜜汁を吐き出し、二本の指を喰い千切らんばかりに締めつけた。

「……っっっ!!!」

包皮を剥かれ、剥き出しになった桃色の真珠が親指の腹で押し潰され、ついに敗北の瞬間は訪れる。

ギクンと桜樺の全身が硬直し、怜悧に澄んだ瞳がガラス玉のように濁って、焦点が掻き消えた。全身を拘束されても抵抗し、諦めることなく足掻き続けていた身体が、まるで時が止まったように硬直する。背筋やつま先を極限まで反らし、すべての筋肉を硬直させると、桜樺は一個の美しい彫像と化した。

「んぶあぁッ～～～～～～っ!!!」
塞がれた唇から敗北の漏れる、憎き妖魔の口内で悲しい叫びが幾度も幾度も尾を引きながら反響した。真っ赤に焼けた快楽の槍が膣洞を潜り抜け、ザクザクと女芯に突き立つ。甘美の槍衾（やりぶすま）にされた子宮壁が悲鳴を上げて収縮し、愉悦の涙で清冽な緋を色濃く染め上げた。
「やっ、こん……な!!　も、もう……んぐぅんんんんッ～～～～～～っ!!!」
弾かれるように妖魔の唇を振り払い、生まれて初めて去来する絶頂の予感に白い喉を震わせる。それでも浅ましい屈服の叫びだけは上げまいと噛み切らんばかりに、唇に白い歯を立てた。だが底意地の悪い陵辱者の指がそんな悲壮な抵抗を許すはずがない。
押さえ込まれていた秘核が解放され、可愛らしい萌芽は弾力によって跳ね起きる暇さえなく親指と人差し指に再び囚われる。二本に増えた快楽の獄吏は初めての絶頂に震えるばかりの無力な新芽をさらに強く抱き込んだ。漆黒の髪がパッと簾のように白衣の上を滑る。
キュウウッ!!
「くぅうあああァァ――――――っ!!」
淫虐の狩人に快楽の矢をもって射抜かれた若鹿は、長く尾を引く悲しい鳴き声で夜の空気を震わせ、そのしなやかな身体がピクンと大きく跳ねさせた。
極大の雷光が秘核に炸裂し、一瞬の時さえ置かずに金色の閃光が身体の芯を突き抜ける。極限の光にあらゆる感覚は飽和し、過剰なまでに追加された快楽情報の伝播に耐えきれず、

『第五章　桜樺散華』より

腹に響く声、絶望の宣言にも汚らわしい排泄口は淫らな期待に熱く疼いてしまう。愛する。そうこのおぞましい蟲鬼は桜樺の卑しい穴を何よりも愛していた。そして忌まわしき「愛」の行為は幕を開ける。

『いただきます……』

桜樺を文字通り味わうために……。

「ま、また……？　いや、いやだ、いやだぁぁっ……あ、あおぉおおおォォォッ!!!!」

ドチュルルルルルッ……。

腹の中から鳴り渡る怒涛の爆音。最奥まで突き込まれた肉嘴がまたも肉ストローへと変化した。おぞましい吸引が、僅かに滲み出ていた腸液を凄まじい勢いで啜ってゆく。嘴の先端だけでない。長大な肉茎全体から吸淫され、腸全体が内側に向かって引っ張られる。先ほど力を奪われたときの比ではない。

もはやそれはバキュームとさえ呼んでいい勢いで腸内の空気や腸液、老廃物までがヤスリと化して傷だらけの腸壁の上をこそぎ削った。

「ウぐぅぁあぁぁあぁあぁぁァァ〜〜〜ッ!!」

あの時は何が起こったのかろくに知覚もできず。ただ力が失われていく虚脱感と内臓が肛門から吸い出されるような激感のみにすべてを支配されていた。だが、今は違う。

快楽のヤスリが腸内すべてに赤悦の火花を爆ぜ散らした。被虐の悦びに目覚めた恥知らずの穴や腸粘膜は微細な傷口を灼く激痛さえ闇色の悦びへと反転させる。腸液が、僅かに

残っていた霊力が、老廃物が、桜樺の何か大切なモノと混じりあいながら異形の虫の口の中へ、腹の中へ消えていく。

腸内を伝わる振音と轟吸感が打ち消すことなく共鳴しあい、快楽団（オーケストラ）の狂奏者たちは絶頂の弦を切らんばかりに掻き鳴らし続けた。壮絶な嬌声は重ねられた唇の中でやむことなく反響し、鬼の腕の中で身体が壊れた玩具のように飛び跳ねる。

『すっぱらしいですね。コクがあってまろやかで、たまりませんな。癖になりそうですねぇ。お代わりで……』

ドズズッズズッズズズ〜〜〜ッ!!

「あぎぃいいいィ――ッ！　や、やめろ。変態いぃ……す、吸わ……吸われぐぅ〜〜……も、もう何も残ってない……ない……なひぃぃぃ〜〜…っ!!」

引き締まった尻タブが強張り、ギュウッとえくぼを刻んで異物を喰い締める。禁忌の快楽が熱気の坩堝（るつぼ）と化した腸粘膜をどす黒く染め上げ、性の玩具に成り下がった排泄器官を狂悦させた。奈落の底にまで引き込まれる。決して浮かび上がれない深く、昏い快楽のどん底に両脚を掴まれてズリズリと引き摺られる恐怖に戦慄し、心のどこかで狂喜した。

『うひゃひゃ、おやもう終わりですか？　では、少しお返ししますよ〜〜』

ビチャリ……笑い声とともに水分を吸い尽くされ引き攣った腸壁に灼熱の粘濁が浴びせられる。腸壁の傷口が真っ赤に炙られ、疼掻の歓喜に悲鳴を上げた。カサカサの腸粘膜に、ドクドクと妖毒が注がれ、吸収されていく。干からびた粘膜が急激に膨張していった。

血流が長く途切れた組織に、急激に血液が流し込まれ、狂おしいほどの痺悦が腸全体から津波のように押し寄せてくる。

「あつ、熱いぃぃっ‼　こ、このぉっ……人の尻を玩具にする、するなあぁぁ――――っ‼　だめ。だめぇ……こんなの、こんらのおおぉぉぉぉ――――‼」

動きを止めた鬼に成り代わり巨大蚊の嘴が腹の中でウネウネと蠕動し始める。たっぷりと注ぎ込んだ妖液を腸内で攪拌し、無数の繊毛で襞の一枚一枚を丁寧にくすぐられた。

ぬめつく妖毒を腸壁に擦りつける肉針、内臓の中を寄生虫が這い回っているかのような汚濁感と腹の中で腸が蠕動する恥辱音に限界まで振り上げた頤が激震した。心が発する痛みと苦しみ、それなのに剥き出しの神経を刷毛で掃き梳かれるような掻悦責めは今のお尻にはあまりに心地よすぎて……せめぎ合う理性と欲望に発狂しそうになる。

腰が暴れ馬にでもなったかのように好き勝手に飛び跳ねる。そのたびに膣内に埋まったままの剛直に中を小突き回され、腸側と膣側の肉の凶器が無茶苦茶にぶつかり合った。ソレがさらに腰の動きを加速させ、快楽の無限循環に陥った桜樺にはもう何が何だか解らない。

引き裂かれた袴が赤い旗のように振られ、汗を吸って重くなったはずの銀髪がそんな枷などお構いなしに右に左に振り払われる。

（……こんな屈辱っ！　……こんな、こんな惨めな……のに、どうして私は……私……？　変だ……おかし……い……ぜ、絶対に……おかしい……なんでこんなに……お尻が……お

尻が……こんなの……）

気持ちいい。浮かび上がる思考を必死に振り払った。いくらなんでもこんな……抵抗の意思がどんどん萎えていく。怒りも、悲しみもどんどん薄汚い悦びに染め変えられていく。

おぞましい快楽を否定しようと首を振り立てても、涙と涎を撒き散らしながら泣き叫んでも沸き上がる想いは止まらずに加速していった。信じられない。こんな行為を行う鬼が、そして信じたくなかった。そんな行為に感じてしまう自分が……。

『……姫様は何も考えなくてもいいのですよ。ただ快楽に身を任せていれば……ね』

まるで心を読んだかのような鬼の声が腸内を素通りし、脳の芯を痺れさせた。高く反らした喉を震わせ、たったそれだけで軽く果てながらも桜樺は戸惑いの目を背後に向ける。

「な……くあぁぁッ？……そ、そん……まさ……ひぃぁ、あひぃあぁぁぁ――――――ッ!?」

ギシリ……心が凍りつくようなおぞましさと恐怖、絶望に一瞬、何もかも忘れた。だが最悪の想像に青ざめた顔も、すぐさま魔悦の媚熱に赤らみ、一気に紅潮する。

「ほう……気づいたか？　そうだ。そいつが啜っているのは、何もお前の体液や力だけではない。お前のその心を、抵抗の意思や我らへの怒り、憎悪を啜り喰っているんだよ」

桜樺と向かい合って抱き合っている鬼は薄笑いを浮かべる。

「そ、そンなはぁっあぁッ？　ひあぁっ……や、やめっ……きひィああァっ!!」

ズズズ……ヂュルルッヂュルッルッ。

自分の心の中を覗かれ……いや食べられている……？

想像もできない屈辱が湧き上がり、すべて啜られる。怒りに脳が沸騰しても吸い尽くされる。後には卑しく甘い悦びしか残らなかった。かつてない精神の虚脱感、もう何もかもどうでもいい。この素敵な快楽に身を任せてしまいたい。心の片隅のどこにあったそんな捨て鉢な諦めが心の中心に無理矢理引き寄せられる。

「だめ、だめだめぇぇ……許してくれ‼　そんなっ……そ、そんなのッ……ひぃぁあぁっ！　……お、お願い……耐えられない……こんなのっおぉおおぉ〜〜〜っ‼」

人の心がまた吸われてゆき、妖気がさらに送り込まれた。白銀の髪がうねるように舞うと妖しく輝き、真紅の瞳は禍々しく明滅する。八重歯や爪がパキパキと音を立てて伸びていくのが解った。桜樺の中の鬼が膨れ上がっていく。人としての心が薄れ、壊れていく。あまりに急激な人体改造に全身の細胞が溶かされ、神経が灼き切られ、骨が軋んで悲鳴を上げた。

「うははは っ……ご苦労だったなぁ。そうさ、お前はすべてを奪われるために生きてきたのだよ。その悲哀の心さえ、俺たち鬼の至高のご馳走だ」

ずっと考えないようにしてきた……ずっと心の奥に仕舞ってきた恐怖が心を支配する。

「あひぁ……い、言うな……やだぁ、もういやだぁぁっ！　……も、もう言わないでぇ……っ！」

呆然としたようにただ掠れた声が漏れた。拳を力いっぱい握り締めると、漏れそうになる嗚咽を必死に噛み殺し、零れ落ちる涙を隠すように顔を背ける。

母を喪った悲しみも、怒りも悔しさも、大切な想いのすべてを弄ばれ、この上なく無惨に踏みにじられた。もう自分には何も……何も残っていない。

悔しさと怒りに流されていた涙がただ悲しみのためだけに流される。そこに勇ましく猛き剣士の姿はない。心の奥底に大切にしまっていた想いを穢され、母への思慕を砕かれて泣く一人の少女の姿だけがあった。

「伝わってきますよ。姫様の悲痛な想いが、清く美しい魂が発する孤独な輝きが……なんという美味ぃ、なんという快感ぅぅ!!　ウヒハハハッ!!」

「ひぃあぁぁ……もういやァッ！　イヤなのッ!!　こんなのいやぁぁぁ!!　堕ちるうぅっ！　む、無理っ！　無理ィ!!　わ、私……わたし……もう、もう殺してぇぇぇ〜〜〜ッ!!」

一啜りごとに自分の大切な想いが喰われていく。不浄の穴から誇りが、尊厳が、心も魂も……桜樺という人間のすべてが、糞便と一緒に鬼に啜り喰われていく。心の自由さえ奪われ、魂の純潔さえ汚され尽くした。

なのに……それなのに……それさえ気持ちイイなんて……駄目、もう自分は戻れない。狂わされた身体は無情に高まり、傷つき砕けた心はどこまでも流されていく。

尻穴と秘唇が果ての見えない場所へと高められ、両穴は喰い千切らんばかりに肉塊たちを締めつけた。人外のタフさを誇る鬼たちもたまらずに呻く。苛烈な吸引に腸が引きつれ、吸いつくように肉毛虫へと密着する。10メートル以上の腸壁すべてが今や快楽神経の塊だ。

そんな密着状態で人外のストロークが再開すればどうなるか？　答えはすぐに出た。
「ッひぉおおぉおおぉおッ⁉　そんなぁッあァあああァあああァぁぁ――――ッ!!!」
光も、音も、感覚も、何もかもが闇の快楽に塗り潰された。破滅的な超悦の渦が死に勝る激痛さえ呑み込んで消し去っていく。
（凄いいぃ……あ、ああ、もう何も考えられないのぉ……し、尻が……お尻がぁぁ――――ッ！　お尻凄すぎるうぅぅ――――ッ!!）
数秒と間を置かずに、意識が白と赤の悦滅を繰り返し、自ら求めるように腰を激しく動かす。双乳の桜豆など進んで鬼の胸板に押しつけ、なすりつけるように前後に動いていた。
袴の裂け目から除く秘唇は愛液で真っ白に泡立ち、接合部ではグチュグチュと卑猥な蜜音が休みなく響く。腰も、胸も、より深い快楽を得ようと鬼の動きに合わせて、淫ら神楽を狂い舞った。ギュウギュウと締めつける胎洞の力強さと動きの激しさに射精欲求で痙攣する男根を絞り上げられた鬼が仰け反るように呻く。
「う、おおっ……こ、これはたまらんな……さ、さあ、注いでやるぞ⁉　元気な子を産むんだぞ。そぉらゆくぞおおぉ――――ッ!!」
ドクン!!　肉根の脈打つ鼓動を膣の襞の一枚一枚で、はっきりと知覚できる。期待に熱くうねりを上げる秘穴が、待ちわびていたように蜜液まみれの巨根をギュウウッと抱きしめ、爆発寸前の射精中枢にとどめを刺した。
「オッ、オッ、オオオォォ――――ッ!!」

尿道を突き刺すような射精の快楽に陰嚢が縮み上がり、歓喜と獣欲に満ちた咆哮が上がる。桜樺の胎奥にビチャリッと音を立てて熱いものがぶつかるのを感じる……感じさせられた。

信じられないほど熱く濃い、まさに白いマグマと呼ぶにふさわしいその第一射はあっさりと桜樺の意識にとどめを刺した。粘膜内に沸騰した硫酸でも流し込まれたかと錯覚するほどの激感が灼熱感、そして夥しい快絶感に女のすべてを埋め尽くされる。

「〜〜〜〜っ!!」

見開かれた瞳の上を真っ白な光が無数に飛び散り、開いた口は「あ」の形で硬直した。半裸と呼んでも差し支えないほど開けられた白衣がスルリと弐の腕から滑り落ち、足袋の中で十本の指は極限までギュッと丸まる。湯気が吹き上がるほど背中に汗で貼りついた銀の髪が扇情的な美を停止した時間の中に醸し出していた。

呼吸が止まり、満足に言葉が出てこない。全身が彫像のように硬直し、パクパクと開閉する口からは擦れた呼気が漏れ続けた。

「……あぶッあぁああっあぁぁぁ〜〜〜ッ!!!　おひぉおおおおぉぉぉ〜〜〜〜〜ッッ!!!」

ようやく声帯が長い硬直から解放される。酸素を求めるよりも何よりも優先して獣のように咆哮し、惨めで、浅ましいメス犬の泣き声を上げた。

思い出したように肉体の時が動き出す。背筋に沿ってみっちり詰め込まれた快悦の炸薬が連鎖爆発を引き起こし、絶頂の爆衝は脳天までを一気に突き抜けた。理性や意識の一欠

けさえ残すまいと木っ端微塵に吹き飛ばす。
ドピュ！　ドピュッ!!　ドピュッッッ!!!
粘度も熱さも勢いも量も、すべてが規格外の精の噴火に比喩ではなく身体が浮き上がる。汚液の奔流は、精液が男根と化して犯されていると幻惑されるほどの物理的な衝撃を生み出した。並みの人間の何十人分とも知れない量と濃さの暴力的なまでの射精爆発に、膣内も子宮内も瞬く間に制圧され、隅々まで蹂躙される。
ブシャァッッッ……！
堰が決壊する音とともに、これ以上ないほど白く泡立った絶頂のメス汁が鬼の腹の上に、床の上にブチまけられた。型取りしたように肉棒の形を憶え込んだ膣襞は、白濁を吐き出す肉塊に精液のお代わりを要求しようと愛しげに抱き包み、キュンキュンと熱い抱擁を繰り返す。
「お……お……おぉ……オオオォォッ!!」
男根を包み込み、鈴口を吸い上げるかのような快楽に、真下で鬼が歓喜の悲鳴を上げた。繋がったままの桜樺の子宮口へと亀頭の先端を突き込み、ひくつく砲口が喰いつくように最奥に押しつけられる。
ドピュルルッ！　ドピュウウウッッ!!　ドプウウウウッッ!!!
「んああぁぁアァァァ……アソコ……あつ、熱い――ッ!!　熱ひぃィィィ――――ッ!!」
枯れることを知らない精の連撃に胎内を紅蓮の炎で灼かれ、忘我の極みで狂悦した。銀

糸の髪が月光を反射しながら夢幻の如く舞い乱れ、激しい動きに涙が雫となって飛び散る。
快楽の熱暴走を引き起こした身体は、絶頂の乱舞についていけずに痙攣を繰り返すが絶頂の舞台からは降ろしてもらえない。哀れな巫女は淫らの水音と浅ましい嬌声を伴奏に、至悦の神楽をひたすらに舞わされ続ける。
鬼は断続的な射精の快楽に身震いし、思わず豊白桃を鷲掴んだ両手に力を込めた。形良かった美峰がフニャリとふしだらに型崩れ、心臓が爆発するような胸悦に「あひん!!」と牝は惨めに甘叫ぶ。尿道に漲る子種汁を一滴残らず注ぎ込むべく、桜樺の細い腰を引きつけ、繋がりを深め続けた。
「さあ、イクと言え……お前の母のように、性奴として堕ち果てるんだ!!!」
ドプッ！　ドプウッ!!ドプウゥゥ――ッ!!!
下腹部が熱くて、熱くてたまらない。子宮のすべてを焼けるような粘塊にノックされ続け、それだけで身体が裂けてしまうかと錯覚した。お腹の中で素敵なダンスを踊り続ける異物からの贈り物に、なんであんなに嫌がっていたのかなんて、もう忘れてしまった。
絶頂に息んだ括約筋が締まって肛穴挿入の肉毛虫をギュッと締め上げる。きつい締めつけにむしろ嬉々と悦んだ長蟲のような嘴は、びちっびちっと妖毒を吐き出しながら縦横無尽に蠢動した。極限まで研ぎ澄まされた肛感神経が末期の痙攣を繰り返しながらも、従順に生み出された肛交快楽を脳が擦り切れるほど送り出す。
「あ……あぁ……許……許ひ……てぇぇっ!!　い、いい……私いひのォォ……もうィイク

ゥ――っ！　イッてしまうぅぅ、母様、私イカされてしまうぅぅ～～～っ！」
蕩ける頭では推考さえさせてもらえず、ひたすら鬼の言葉に従い屈服の叫びを連呼する。
「お尻もアソコも……気持ちいいのォ!!　だめぇぇ――ッ！　も、もう、イクゥ――ッ!!
私駄目……母様もう駄目エェェ～～……ッッ!!」
子宮と腸内で今まで溜まっていたすべての快楽が一斉に爆発した。極彩色の悦光が背筋を駆け上がり、頭の芯まで突き抜ける。脳髄は幾百とシェイクされ、数瞬で軽く二桁は意識が砕け、潰えたかもしれない。
（あ……私……わたし……ワ……タシ……）
膨れ上がる妖気、啜り喰われる心……真紅の妖瞳がゆっくりと明滅の間隔を縮め、最後に一際強く輝くと焦点を完全に失った。
ドクン……。
人としての最後の鼓動が桜樺の中で静かにやむ。爛々と真紅に輝く瞳を見開き、長い犬歯の生える口を開け、至悦の果てで桜樺は人としての断末魔の絶頂を謳った。
「あ、あ……ッァあああああああぁァ～～～わたしいぐぅ～～～～……ッ!!」
心の奥底まで砕かれ、穢された巫女の悲痛な慟哭が、魂が磨り潰されるような絶望の鎮魂歌が、途絶えることなく響き続ける。
ゴポリ……収まりきらなかった鬼の精が溢れて零れ落ちた。互いの体液と汗で緋色などもうどこにもない濡れ袴の残骸をさらに穢し尽くし、床の蜜溜まりにも黄色みを帯びた白

濁が広がった。混じりあう二人の体液の海に浮かぶ赤い雫が、少女の心が流す血涙のようにも見えた。
「ハァ……ハァ……ククク……」
額や頬に汗で貼りついた銀髪を指で撫でつけながら、荒い息をつく少女に鬼は囁く。
「最高だったぞ。コレでお前は俺の物だ」
「……はぁ……はぁ……は……い……」
隷属の告知に、虚ろな瞳で力なく頷き、咽るような精臭の中で絶頂の余韻に身を震わせる。
その美貌は至悦に溺れきり、犯された屈辱も、子を孕まされた絶望も忘れて随喜の涙さえ流していた。
感じる。子宮内に着床した子種が息づき、桜樺の中で成長していくのが……。
(わ、私の……赤……ちゃん……?)
桜樺は体内に宿る自分の子の存在を感じ取り、同時に意識の最後の欠片を手放した。

第八章　闇に堕ちた鬼巫女

「はぁ……んんんっ……そんな、また……まだ……こんな……はぁ……」

数本の蝋燭が照らし出す薄暗い寝室でひとりの女の艶めかしい吐息が寂しく響く。畳の上に設えられた寝床には天日に干された大きめの和布団が敷かれ、心地よい太陽の匂いを放っていた。だが、今はその床は使われることはなく。そのすぐ横では後ろ手に縛られ、柱に縛りつけられた桜樺が荒く息をつき、激しく肩を上下させていた。

凛と引き締まっていた美貌は今や絶望と苦悩に歪み、苛烈に輝いていた瞳は焦燥と餓悦に澱んでいる。色っぽく上気した頬に残る涙の跡は先ほどから枯れることはなく、だらしなく開かれた桜色の唇からは零れる唾液の筋さえ拭われることなく放置されていた。

結局、あの女妖魔に一度だけイカされ、その後は地獄の焦燥をひたすらに味わわされ続けた。意識が灼き切れるほどの絶頂を味わったというのに、身体はすぐさまさらなる快楽を求めてしまう。決して満たされない肉欲を狂おしいほどに憎悪しながら、今も真っ白な快楽の海原で、真っ黒な悦楽の嵐に翻弄され続けるしかない。

「はぁ……こんなの駄目だ……はぁ……あぁぁ……でも熱い、苦……しい」

この部屋につれてこられ婚姻の際に着せられた儀式用の礼装に似た衣装に着替えさせられてからどのくらい経っただろうか？　時間の感覚などとっくに飽和し、餓死かもしくは

狂死しそうなほどの快楽への飢えと渇きのみが今の桜樺を支配する感覚のすべてだった。
「うっ……くぅ……」
小さく呻いて身を捩る。白足袋を穿いた足は床の上をそのつま先で蹴りつけるように足掻き、脚の付け根は袴の裾が乱れ、はしたなく開けられている。胸元も乱雑に開かれ、そこから覗く汗ばんだ肌や半ば以上露わになった朱に紅潮した美峰、噎せるほどの濃厚な色香を巫女の乱れ姿は放っていた。
クチュ……控えめな。しかし、決して秘せないヌメリを帯びた水音が薄暗い室内に静かに響く。しなやかな両足の付け根付近、内股気味に閉じられた太ももがもどかしげに擦り合わされ、そこから思い出したようにその水音は響いていた。
緋色の袴地はすでにどっぷりと変色し、そこから時たまに響く淫らの音は巫女が淫蕩の自慰に耽っていることをこの上なく示していた。
「あっ、あっ、だ、だめだ……こんな……やめないと……やめないといけないのに……」
僅かに甦った理性は、何とかこらえようと両拳を骨が軋むほどきつく握り締める。だが切なげに擦り合う両膝とそこから漏れる水音は決して止まることはなく、その動きが少しでも鈍ることはなかった。このままここにいれば憎き仇の陵辱が待っているだけなのに、自分は逃げることもできずにこんな浅ましい行為に溺れている。その先にある境地を想像すると下腹部がたまらなく熱くなってしまう。
（私の身体……狂ってる……もうこんなに……壊れてしまっている……）

両手さえ満足に使えない状態での本能に任せた動きでは飢え狂った肉体は満足できない。それでも肉の内側では貪欲に快楽を貪ろうと餓狼が涎を垂らして低く唸り、極限まで圧縮された淫欲の濁り火は肉も心もグズグズに焼き溶かそうと燃え上がる。

「あ……ああぁあっ、私……わ、私……も……もうウぅ……っ!!」

「ククク……随分と待たせてしまったか？」

あとほんの少し……極大に膨れ上がった渇望の風船が一気に爆ぜ割れる。その間際に薄闇に響いた声、桜樺はまるで氷水でも浴びせられたかのように意識と肉体が凍りついた。

「あ……」

忘れようのない声に、掠れしゃがれた声でのろのろと呟く。潤みきった真紅の瞳が怯えるように闇を見上げ、そこに想像通りの相手がいることを知ってゆっくりとカラカラの喉を鳴らした。

「どうやら俺が来るのを待ちきれなかったようだな……それとも、俺のためにわざわざ身体をほぐしておいてくれたのか？」

「っ!!　……ち、違う……違う!!　これは……っ!!」

憎い仇の視線が乱れた着衣とだらしなく投げ出された両足の間に注がれている。こみ上げた恥辱と悔しさでわずかに蘇った正気が、着衣の乱れを必死に隠し、脚を慌てて閉じさせた。だが、上気した頬に、上がった息、部屋に満ちる濃密な牝の汁臭、床の上や脚の間を濡らす水溜まり……桜樺が何を望んでいたかなど隠せるものではない。

「いまさら気取ることはなかろう、それにしても……そんなに待ち遠しかったか？」
言葉もなく、自分と母の人生を狂わせた憎い仇から視線を逸らした。ふざけた言葉を罵倒し、拒絶し、否定したかった。だが、途中で行為をやめさせられた肉体は、もはや精神や意志の力だけではどうにもならないほど追い詰められている。羞恥や屈辱さえ巻き込んで胎内では呪わしいほどの焦熱感が嵐のように荒れ狂っていた。
「止めることはない。さあ、ゆっくり続きをやればいい」
「くっ……う……」
どこまで人を貶めれば、辱めれば気が済むのだろうか？　頂点に達した怒りと悔しさが性奴へと堕した肉体の枷さえ打ち破ろうと燃え上がる。闇の縛鎖に囚われ悲鳴を上げる心と魂を決死の思いで奮い立たせた。
「ふ……ざけるな。貴様の……貴様の思い通りにだけは……絶対にならない……ぅ……」
ノロノロと顔を上げ、両手を縛られた状態で鬼を見上げる。無理矢理動かした手足がガクガクと震え、乱れた息は瀕死の重傷者を思わせる。それでも凛烈な輝きを取り戻した瞳は天上の宝石を思わせるほど眩しく、その内には意志という星々をちりばめ煌めいていた。
「さすがにまだ折れぬか……フム、花嫁にあまり無理強いをするのも無体だな」
桜樺のこの期に及んでなお反抗的な態度に、むしろ嬉しげに眼を細め、唇の端を吊り上げる。そのまま桜樺の傍まで近づくと床の上にドカリと胡坐をかいて座った。
「そうだな……それでは彼奴に相手をしてもらうとするか……」

銀鬼の台詞に不吉なものを感じ、戸惑いを宿した視線を敵に向ける。この男が自分を犯すことをどんな理由があれ躊躇うはずなどない。そこには絶対に自分を辱め、貶め、堕落させるための下衆な策略があるに決まっている。

「お前も知っている。先ほどまでお前の相手をしていたあの女だ」

「な……!?」

ニヤニヤと舌舐めずりをしながら鬼は嗤い、桜樺の表情は蒼ざめて凍りついた。先ほど散々に辱められた相手、母の姿を騙り、自分の心と身体を嬲り抜いた妖魔だ。憎んでも憎みきれない鬼の配下にしかすぎない。

「俺の命令に反して、お前をイカせたのだからな。その仕置きもしなければなるまい。たっぷり痛めつけてから、二度と俺に刃向えないように……」

「……っ、や、やめろおっ!!」

鬼の言葉を遮り、思わず絶叫していた。なぜ？　助けてやる義理などない、あれは母ではないのだから、母の姿をしただけの憎むべき敵……自分にとってただ、ただそれだけの存在でしかないはずなのに……それなのに……自分は……どうして……。

「ほう……？　ならばどうするというのだ？」

「や、やるなら……私を、私を好きに……すればいい……だろ」

鬼の愉快げな視線から顔を背け、羞恥と屈辱に途切れる言葉で言いきった。

なぜか、あの女性は心底から憎むことはできなかった。母同様にこの鬼にすべてを狂わ

され、奪われた女性。与えられたものといえば快楽と恥辱、屈辱と怒り……だけだ。それでも自分を案じ、偽物とは言え、歪み狂っているとは言え、懐かしい母の姿に会わせてくれた女性にどこか感謝している自分がいた。

「面白いな……静の姿をしたアイツをお前の前で痛めつけ、辱めてやろうと思っていたのだが……フム、ならばいいだろう。では貴様に俺のものを鎮めてもらおうか」

両手を縛られたままの桜樺と向き合うように胡坐をかく。その身には布切れ一枚身に纏わず、股間からは禍々しいほどに野太い肉の柱が天を衝くほどに屹立していた。黒光りする肉竿は太い血管が網の目のように血走り、獣の顎を思わせる凶悪な鈴口が開閉を繰り返し、先走りの腺液を唾液のように吹き零している。

「くっ……鎮める……だと？」

ギシリッ……怒りと恥辱のあまり縛られた両手に思わず力が籠もる。つい数日前まで生粋の処女だった桜樺であっても常識の範囲の性的知識くらいはあった。自慰さえ経験したことのなかった少女だが、その行為がどういったものかは知っている。だが、それを自分が……この鬼に、仇に……自ら奉仕するなど……。

「そう、俺のイチモツを……そうだな。ちょうどいい。お前のその足で慰めてもらおうか……ほぉら、こんな風にな!!」

グイッ!!　想像さえ及ばない行為を要求され、屈辱に固まる桜樺の両足首を握り、その足袋底でちょうど自分の肉槍を挟むように固定する。足袋越しに感じる怒張の灼熱感と鋼

を思わせる強度に、思い出したくもないあの感触に恐怖と戦慄で全身が竦み上がった。
「どうした……？　じっとしていても始まらないぞ？　それとも……」
「くううぅぅっ!!」
揶揄するように嘯く鬼の言葉に、唇を血が滲むほど噛み締めながら足を動かし始める。恥辱のあまり心がどうにかなってしまいそうだ。無理矢理に犯されたほうがよほどマシだろう。
シュニ……シュニ……シュニ……。
技巧など微塵もあるはずもない。ひたすら獣根を挟んだ足裏を擦りあわせるだけの稚拙極まりない奉仕だ。経験も、何より情熱もない性技に絶倫の精力を誇る剛直が満足できるわけもない。物足りげに、そして苛立つかのように剛直がピクピクと震える。
「ふん……下手糞め。まるでなっていない。そんなもので俺が満足できると思うのか？」
蔑み果てた勝手な言葉に脳が痺れるほどの怒りを覚えた。だが逆らうことも今はできない。ただひたすら脚を動かしながら、眼だけは目映い怒りに煌めかせ、上目づかいに銀鬼を射殺さんばかりに睨み据えている。
「生意気な目だな。そんな目をする暇があったなら、もっとマシに足を使わぬか、ここだ」
自動人形のように単調な桜樺の動きに焦れたのか、鬼は右の足首を掴むとそのつま先がちょうど亀頭の先端を覆うように持ってくる。先ほど足袋越しに触れていた肉茎よりもさらに熱く、硬さよりもおぞましい弾力が足の指の付け根に当たった。

「まったく世話の焼ける奴だ……そうら、こう動かすんだ」
足首を握ったままゆっくりと桜樺の足を亀頭に這わせる。布地越しに足裏を撫でつけるような無気味なくすぐったさとおぞましさが足の裏や指から伝わってきた。時折小指や中指が鈴口を掠めるたびにヒクヒクと蠢き、溢れ出す先走りの汚液に白の布地が汚されていく。
まるで指導するかのように左の足首も握り、そちらは横からカリや竿の側面を撫でつけるように、掠めるように動かした。スリスリと布地の摩擦や少女の体温が心地よいのだろう。痙攣するような無気味な動きを見せる肉槍は硬度と熱さを天井知らずに増していく。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
だが変化は鬼の男根だけではない。桜樺の肉体の中で抑え込まれていた肉欲の疼き、鬼への憎悪と怒りで必死に忘れようとしていた焦燥と渇望感が腰の奥からせり上がってきた。息が乱れ、汗が吹き出し、心臓がバクバクと早鐘を打ち始める。
足裏でカリを擦るたびに、指の腹で鈴口をくすぐるたびに脚の間がジンジンと痺れる。裏筋をつま先で掠め、陰嚢を収めた袋は指を使って揉みしだいた。いつしか瞳も切なげに揺れ、握り締めていた拳も力なく緩んでいる。鬼が掴んでいたはずの足首が離され、桜樺は無意識のうちに教えられた通りの性技を自分から駆使し始めていた。
「そうだ。やればできるではないか。それに随分と……気分を出してきたんじゃないのか？」
「はぁ……ふざけるな……だ、誰が……うっ……」

クチ……。

足を動かすたびに、腰の奥深くで焼け溶けた鉛のような重く熱い疼きを感じてしまう。まるで足の下で脈動する鬼の欲望に呼応するように、その疼きの間隔は速くなり、その激しさを増していった。先走りでベトベトになった布地が気持ち悪いのに、チクチクと不思議な掻痒感が肌を刺激し足裏の感覚が研ぎ澄まされていく。

「ククク……強情な奴だな。だが、お前の身体のほうはどうかな？」

「く……ぁ……なんだ……と？　ふぁ……どういう意味……だ？」

クチ……クチ……。

桜樺は気付いていない。先ほどから聞き覚えのある粘着いた水音が響いていることに、下半身からは自分の心身を散々に苛んだあの感覚が上がっていることに気付いていない。

（これ……は？　どうし……て…）

整えていたはずの息が再び、荒く、熱く、甘く切なく乱れていく。汗で光る背中が震え、腰が小さく揺れ、強張った太ももが細かく痙攣した。不可思議な波が下半身からゆらゆらと心と肉の内側を緩やかに揺さぶってくる。

「まだ解らないのか？　先ほどから、ほれ、脚の間が随分と切なそうだぞ……？」

「な……」

クチュ……クチュ……クチュ……。

意識を向けたことで水音がより鮮明に鼓膜を震わせた。視線を怯えるようにゆっくりと

自分の脚の間に向ける。脚は内股気味に閉じられ、それが切なげに擦り合うたびに音は奏でられていた。下半身から断続的に沸き上がっていた痺れるような愉悦の波は一気にその感度を倍加させ、湧き出す蜜がドッとその量を増した。

「ああ、勘違いをするな？　別に、俺は今お前を操ってはいない……」

驚愕する巫女をさらに追い詰めるべく鬼は耳元で残酷な事実を囁く。妖術で操っているわけではない。それがお前の淫らな本性なのだと、お前自らが望んでやっていることなのだと、そう楽しげに嘯いた。

「そ……そんな……そんな……嘘……嘘だ!!」

震える声で首を左右に振り否定しても事実は覆らない。行為を止めようと意気を振り絞っても妖しい足の動きは止まることはなく、快楽が波紋のように心を揺らめかせ、同時にそんな微弱な刺激では物足りないと打ちのめされた心をさらに追い詰めていく。

（こんな、止まれ……止まれッ!!　止まって……くれええっ!!）

しかし、まるで憑かれたかのように足先ははしたない動きを止めようとはしない。指が妖しく踊るたびに鈴口が呼吸するようにひくつき、陰嚢が収縮する。それに呼応するように恐ろしいまでの快感が生まれた。自分の喘ぎ声と水音を伴奏に聴きながら、自分の足と、その指が、自分自身の心を切り裂き、堕としていく。

「そおら、これが欲しいのだろう？　お前のソコに突き込んで欲しいのだろう？」

桜樺に銀鬼が自らの逸物を見せつけるようにさらに近づいた。ひくひくと痙攣する剛直

に自然と視線が絡み、真紅の瞳が吸いついたように離せなくなる。その瞬間、ヒクリと確かに自身の内側で媚粘膜がビクリとひくついた。

（あ……あ……）

胸が大きく脈打つ。渇いた喉が喘ぐように唾を呑み込み、途端に足の動きが激しさを増した。凄烈な怒気に燃えていたはずの眼は物欲しげに潤み、自分の足がしごき続ける獣根しか見えなくなった。その先端から先走る腺液の生臭い匂いまでが被虐の快楽を煽る。

踊るように、舞うように足先はもうそれが独立した生き物のように男の敏感な部分を探り当て、執拗にそこを責め立てていった。

「止まらない……こんな知らないのに……こんなこと……したことないのにいぃぃ!!」

柱にもたれかかるように背中を預け、怯えるように首を振る。乱れ開いた胸元から半ば以上露出している乳峰が激しい鼓動と呼吸に喘ぎ撃ち、千早と接触する熱いふたつの桜豆はコリコリに勃起している。身を捩るたびに、足を躍らせるたびに、布地の内側と擦れ合い被虐的で倒錯的な悦びが槍のように真っすぐに心臓を穿ち続ける。

クチュクチュクチュチュ……スリスリスリ……。

土踏まずを亀頭になすりつけ、踵で裏筋をグイグイと押し込む。足の指で肉茎や亀頭を握り締め、つま先を敏感な鈴口に突き立て鬼を呻かせた。

どこをどう責めれば男が感じるのかを知りたくもないのに勝手に学習し、最初の拙さなどもう見る影もない。まるで自分自身を慰めているかのような錯覚に陥り、膣口の最奥で

は不可逆の激動が膨れ上がっていく。
「おおおっ、素晴らしい。お前は本当に素晴らしい牝奴隷だ。それでこそ……俺の妻だ」
「黙れ……はぁ……だ、黙れぇ……うあぁぁ……」
床の上には湯気を上げながら粗相したような水溜まりが広がっていき、蝋燭の光を反射して聖液の泉がヌメ光った。その快楽に霞む脳裏には自分を嬲る母の媚笑が、尻穴を貫き啜った巨大蚊の嘴の鋭さが、目の前にある鬼の剛直が浮かんでは消えていく。
「おっ、おっ、さあいくぞ……かけてやるぞぉ」
あの気丈な娘が、懸命にその足で自分に奉仕し、その逸物をオカズにするように自慰じみた行為に耽っている。その姿に鼻息も荒く興奮した鬼は上ずった声で宣言し、血走った鬼眼と脈動する男根を獲物に向けた。尿道が痺れるような快感に、陰嚢内で生成された子種液は出口を求めて轟々と逆巻いている。
「いや……いやだ……こんなの……もう……もう……」
拘束された両拳を砕かんばかりに握り締め、若鹿のようなつま先で伸びあがるように憎い仇のイチモツを押し込んでいく。感極まったように閉じた瞼の裏では無数の星が明滅を繰り返し、小さな胸の内で素敵な予感に激しく鼓動が高鳴った。
ドピュウウウッ!!　ブピュウウウウゥゥ!!　ドクドクドクドクッ!!
大きく口を開いた鈴口から、尿道を駆け抜けた白の濁流が噴水のように迸る。砲弾にも等しい精の初撃が震えるように亀頭の先端を握り締めていた足先に直撃し弾き飛ばした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/